

服を作る前に“人”を作る 社内の職業訓練校で 494人の技能者を育成

昭和45年に大阪で初めて単独事業内で職業訓練校を始めたイワサキさんは、バブル崩壊後もその姿勢を守り、いまでも全国から洋裁をやりたいという新卒を集める。高い技能に支えられた同社の考え方を伺った。

㈱イワサキ代表取締役社長——岩崎靖璋さん

120名の社員…… 中途採用ゼロ、全員自社で育てる

「今の状況を見ていると、日本では縫製技能者は育ちません。だって、高い技能に見合った給料が払われていないのですから……」とアパレル工場の置かれた現状に苦言を呈するのは東大阪でアパレル工場を運営する㈱イワサキの岩崎靖璋さん。そういいながら、ご自身は、昭和45年以来36年間にわたって縫製技能者を育ててきた。卒業生の数494名。輝かしい数字である。もちろん現在の社員も中途採用はゼロ、全員が新卒で入社し、社内で育成した。

「社内に職業訓練学校を作ろうと思ったのは昭和44年でした。当時は、オペレータは全員中学卒業生で、高度成長期は金の卵でしたからなかなか新卒が集まらない。四国から九州の学校を回ってもなかなか集まらない。四国のある職安に募集に行ったときに、職業訓練をやれば集まると言われた。そのときはよくわからなかったのですが、これ!と思った。そこで、すぐに大阪に戻ってきて大阪府に相談に行き、職業訓練校の設置を決めた」と岩崎さん。

訓練校で心に火がともる いいパーツから、いい服が生まれる

もともと工業学校の機械科を出てモノづくりに関心があった岩崎さんにとって、親が始めた縫製工場をただ受け継いで経営するというだけでは満足できなかった岩崎さんの心に熱く火をつける何かは職業訓練校の中にあつたに違いない。

「仕事を始めてしばらくは身が入らず、プラモデルを作っていました。そのうちに、服作りもプラモデルも同じだと気がついた。パーツがしっかり作られていれば、組み立て

もしっかり出来る。これをやるために、パーツ作りの理論と実技をキチンと教えよう……という気になってきて、やっと服作りに身が入るようになった」(岩崎さん)。

こうして始めた職業訓練校だが、以来36年。高度成長からバブルの時代へ、そしてバブルが崩壊して、低成長の時代へと環境はめまぐるしく変化した。その間、中国の工場が台頭し、ほとんどの仕事が中国へ行くようになった。そして、多くの職業訓練校が、新卒が集まらず運営する人数に達しないと閉鎖されてしまった。そんな変化にもかかわらず、岩崎さんは職業訓練校での技能者育成を続けてきた。

時代は変わっても技能の重要性は不変、 高技能でしかできない仕事だけをする

“どうぞ時間と金をかけて技能者を育成してください。育ったら私のところでもらいます”……遠くでそんな声が



「やり方は昔とまったく変わりません。技能重視で、技能士を養成していきます」と代表取締役の岩崎靖璋さん。



東大阪の本社。近くに検品工場、寮など5棟が建っている。すべて自家所有。堅実な経営が行われている証拠でもある。



現場は4-5人の少人数編成で、グループごとの丸縫いが行われている。

聞こえることもあった。講師謝礼などを含めると訓練校の維持費に、年間数百万円がかかる。育った社員に辞められるのはつらいが、採用した社員を信じて続けた……と岩崎さん。岩崎さんは毎年7月～9月は全国の学校を回る。採用に当たっては、2泊3日で現場や寮を見てもらい、体験してもらうことにしているという。時間と金をかけるのなら、長続きする社員を採用したいからだ。第1号の卒業生から、全員の卒業証書のコピーをすべて保管している。

訓練校の卒業制作は、毎年11月に行われる「おおさか技能フェア」のファッションショーで展示される。一人一人の社員とていねいに付き合う岩崎さんの熱意が社員に通じるのだろう、同社では退職者はきわめて少ない。

こうした努力で、今では高い技能が社内に残り、そのおかげで他社では出来ない難しい仕事が同社に来る。工賃もそれなりにいただける。技能者育成の成果である。

ミシンは道具、使う人により変わる 「商品を作る前に、人を作る」

「中国でも出来るものを作るなら、日本でやっている意味はありません。中国に行くべきです。その方がコストはずっと安いですから。日本には日本でしか作れないものがあるはずですから、そういうモノづくりをしなければ、生き残っていけないのではないかと岩崎さん。

「洋服は作る人によって変わります。機械で作れば同じものが出来ますが、ミシンは機械ではなく、道具です。使う

人によってできるものは変わる、だからこそ、いい商品を作るためには道具をうまく使える人を育てなければならぬいんです」と岩崎さんはいう。機械と道具……機械が好きで勉強した人だからこそいえる言葉かもしれない。

「商品を作る前に、人を作る」と岩崎さんはおっしゃるが、図面どおりに商品を作ればいいというわけではなく、それをデザインした人の心もわかって欲しいから、職業訓練校が必要だというのである。

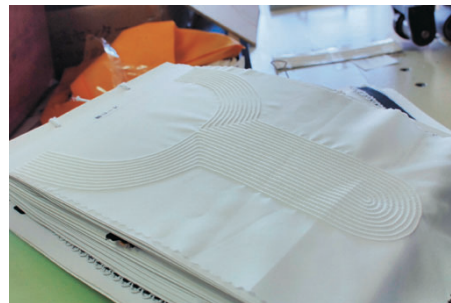
岩崎さんの工場で作る商品は、ジャケットを中心にロケットは約60～70着、月産6,000着。4～5人の班編成で、常にいくつかの商品が流れている状態だから、しっかりした縫製技術と同時に生産管理・工程管理に対する知識も必要だ。しかも難易度の高い仕事が多い。

週に3日間就業後に開校される訓練校を卒業した494名は、362名が2級技能士に、61名が1級技能士に、そして、36名が指導員になった。そのうちの多くがいまも工場にいる。人材育成しかない……と覚悟を決めて職業訓練校を続けてきた岩崎さんの期待に応えるように、工場では難易度の高い商品が作られている。

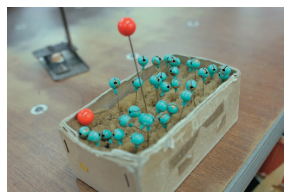
㈱イワサキ
創業：昭和22年
所在地：東大阪市菱屋西
社長：岩崎靖璋
商品：婦人服ブレタ
社員：120名
工場：東大阪（職業訓練校併設）、鹿児島、長崎



手がけるのはジバンシー、ニナリッチ、ピエール・カルダン、ラピーヌ・ブランシュ、ウンガロなどの高級ブレタ。



こうした加工ができるということが、縫製技術の高さを物語っている。



マチ針も頭に鈴がついているものを使用。混入すればすぐに分かる。



こうした運針用紙でミシンの練習をするが、難しい加工が求められる場合、うまく工夫して活用することもある。どれも高度な技能が求められる仕事である。



技能士の資格所有者の証書が掲げられている。



エル・大阪で開かれる「おおさか技能フェア」での卒業作品発表のファッションショー。

職業訓練校での授業風景。社長自ら担当する講義もある。